

柴田明夫著「資源争奪戦最新レポート 2030年の危機」かんき出版 2010年1月5日刊を読む

日本は「つなぎ」の期間をどうするか

1. 筆者は、ここ数年の資源価格の高騰は、「安価な資源の枯渇」と「地球温暖化」という「2つの危機」に対し、対応を急げというシグナルと見ている。中長期的に過渡期の需要が拡大する一方、それに必要な開発投資が不足しているとなれば、投機マネーが入ってくる。
2. 投機マネーも2種類ある。ヘッジファンドのように、短期的な売買を繰り返すものと、年金基金やインデックスファンドのように、3年後、5年後の需給バランスを見て、供給不足だと判断すれば積極的に「買い」だけで入ってくる、いわば長期の投資マネーだ。
3. この点、08年後半の資源価格の暴落は、90年代までの安価な資源を前提に構築された産業構造が、高い資源価格に耐えられず強引に下げられたとの印象が強い。世界経済はまだ底の見えない暗雲に覆われているものの、問題はこの暗雲が薄れたときである。世界中で、原点を見直す動きが強まるだろう。

- 2010年1月28日 林明夫記 -